

『ハツカネズミと人間』における孤独

—1992年版映画との比較を通して—

田 中 紀 子

要 旨

John Steinbeck の小説 *Of Mice and Men* は、1930年代のカリフォルニアの農場を渡り歩く労働者二人の友情を中核とし、彼らの夢とその崩壊を描いた作品である。最初の映画化は1939年に行われ、それ自体の評価は良かったが、原作との違いには喜ばしくない点も見受けられる。それ以後1992年には Gary Sinise 監督・主演で新たに制作された映画は、概ね原作に忠実だと認められてはいるが、それでもいくつかの変更箇所が目につく。本稿では、小説のテーマである孤独、それを表わす人物である Candy と Crooks と Curley の妻、さらにオープニングとエンディングの描き方についてこの1992年版の映画と比較し、原作者の意図と照らし合わせながら検討する。

キーワード：John Steinbeck、*Of Mice and Men*、孤独、映画

John Steinbeck (1902–1968) の小説 *Of Mice and Men* (1937) は、農場労働者 George と Lennie を主要人物に据え、不況の1930年代カリフォルニアにおける彼らの夢とその崩壊を描いた作品である。1939年には最初の映画化¹⁾がなされ、作品賞、作曲賞などアカデミー賞4部門の候補となったほど評価は上々であった。しかし、原作と突き合わせてみると違いが多いことに驚かされる。その一つは、冒頭において Lennie がポケットに鳥の死骸を入れて持ち歩いていることである。Robert Burns の詩の一節、“The best laid schemes o’ Mice an’ Men,/Gang aft agley” から小説のタイトルがつけられたことを考えても、ネズミでなければならないことは明らかであろう。

また、George と Lennie が新しい農場に着き本格的に仕事を始める前に、次のような原作には無い場面がある。ラバ使い Slim との話の最中に、George は穀物袋を積んだ荷

車の前方を Lennie の肩で持ち上げさせる。さらに George 自身が前輪にぶら下がるのだが、Lennie はやめるように命じられるまでその重さに耐える。Slim については、“His ear heard more than was said to him” (32) と書かれ、人々の性格や人間関係を的確に把握することができる “gravity” と “quiet” を持ち合わせた人物とされている。“calm, God-like” (36) と形容されるこの Slim の目の前で、わざわざ Lennie の力と彼の George への忠実さを実証してみせる必要はないだろう。かつて Lennie が自分の命令に対して絶対服従であることを何人もの前で証明するために、泳げない彼を川に飛び込ませたことをずっと恥じている George が、映画に見られるような得意げな顔つきで以上の行動をやったのけるとは考えにくい。

農場主とその息子 Curley、および Curley の妻が食事を取る場面も新たに入れられている。3 人の間では言葉も視線も交わされず、男達のスプーンがボウルに当たったり、食べ物をすする音のみが聞こえる。うんざりしきった Curley の妻が “Aren't you going to take me to the movies as you promised ?” と言うが、夫は “I seen it the other night with some of the boys” とすげなく返答して外出してしまう。原作では Curley とその妻が同じ場に居合わせるところは一度も描かれていないが、Curley の妻の家庭での不満を強く印象づけるための脚本家の工夫は評価されてもよいだろう。

だが、Curley の妻が子犬をなでて可愛がる場面を取り入れたのには違和感を覚える。彼女には日常のイライラを鎮めるものは全く無く、とげとげしい態度を取りがちな人物として描写されるべきであり、子犬を相手に一時でも柔らかな表情を見せることがあってはならないと思われる。他にも原作を歪めてしまった点は幾つもあり、この1939年の映画には Steinbeck の意図が十分に表わされているとは言えない。

この映画から50年以上経た1992年に *Of Mice and Men* の劇場公開用映画が再び制作された。監督を務めた Gary Sinise が George の役をも演じ、カンヌ国際映画祭で最高のパルム・ドール候補となった。Horton Foote が脚本を担当したこの作品に対してインターネット上に掲載されているコメントを拾ってみると、“The classic John Steinbeck tragedy is well-produced and well-directed with exceptionally fine performance by all”²⁾ や、“Amazing to think that neither the film, nor any of its participants, had received any accolades at the time of its release”³⁾ などの称賛の声が寄せられている。またストーリーの展開、情景描写、配役などの面において原作に忠実であることも指摘されていて、概して最初の映画よりはるかに良い仕上がりとみなされているが、脚本家 Horton Foote による幾つかの重要な興味深い変更箇所があることは否めない。本稿では、もとの小説と1992年版の映画において同じテーマをめぐる人物描写、およびオープニングとエンディングについての手法とその効果について比較してみたい。

I 孤独

Of Mice and Men に登場する男達のほとんどがほぼひと月ごとに農場から農場へ仕事を求めて移動する労働者で、独身の彼らには共に旅をする同性の仲間も無い。仕事から解放される週末には街に出かけて酒と売春婦に賃金を使い果たし、将来への希望や長期的な展望を持っていない。小説の初めに George と Lennie が二人きりで登場した時に、George が語る言葉にこのことが表われている。

“Guys like us, that work on ranches, are the loneliest guys in the world. They got no family. They don’t belong no place. They come to a ranch an’ work up a stake and then they go into town and blow their stake, and the first thing you know they’re poundin’ their tail on some other ranch. They ain’t got nothing to look ahead to.” (16–17)

しかし、George はこのあとすぐ自分と Lennie について “With us it ain’t like that. We got a future. We got somebody to talk to that gives a damn about us” (17) と述べる。そしてこの言葉が終わる間もなく Lennie が “*I got you to look after me, and you got me to look after you*” (17) と、これまで何度も繰り返したために暗記してしまったフレーズをいかにも嬉しそうに言う。血縁関係もない親密な彼らの親密な結びつきがいかに稀であるかは、彼らとの初対面の際に農場主の言う “I never seen one guy take so much trouble for another guy” (23) や、Slim が以下の台詞の中に “travel together” を3度も使って驚きを示していることに表わされている。

“Hardly none of the guys ever travel together. I hardly never seen two guys travel together. You know how the hands are, they must come in and get their bunk and work a month, and then they quit and go out alone. Never seem to give a damn about nobody. It jus’ seems kinda funny a cuckoo like him and a smart little guy like you travellin’ together.” (36. 以後下線はすべて筆者)

このような二人の固い結束があるために、彼らを取り巻く人々の孤独がよけいに浮彫りになる。ふだん内心をさらけ出さない彼らは、子供のような無邪気さと人懐っこさがゆえに他人に警戒心を抱かせない Lennie に対して、心に鬱積する寂しさを口に出すことになる。たとえば、黒人の Crooks という労働者は “I tell ya a guy gets too lonely an’ he gets sick” (62) と、また Curley の妻は “I never get to talk to nobody. I get awful lonely” (72) と言うのである。

さらに舞台となる農場は、スペイン語で「孤独」を意味する Soledad という町に近いとされているし、George がしきりにするトランプの一人遊び solitaire は、フランス語で「孤独」を意味する。このような語の使用からも、作品の一つのテーマが人間の孤独となっていることは明らかである。

Ⅱ オープニング

原作の冒頭は、カリフォルニア州 Soledad 近くの Salinas 川沿いの初夏の風景となっている。川の水の “deep and green” (7)、砂の “yellow”、ヤナギの “fresh and green”、スズカケの枝の “mottled, white”、山のふもとの “golden” という色彩に加え、水面にキラキラと反射する太陽の光、そして川の流れ、山の麓、淵の上に伸びた枝の曲線 (“curve,” “arch”) が醸し出す穏やかさと、そびえ立つ岩山の直線的な力強さ (“strong and rocky”) など、視覚的なイメージが打ち出されている。また、深く積もった枯れ葉の上をトカゲが走る音、人が枯れ葉を踏みながら歩く音、サギが舞い上がる音があるかと思うと、ウサギが音も立てずに走り去ったり、しばしこの辺りが静まり返るという音の無い状態についても書かれており、聴覚的な仕掛けもなされている。この地域にはトカゲ、ウサギ、アライグマ、シカ、サギといった生き物が生育し、さらに農場からは犬や少年達が水飲みや泳ぎにやって来たり、時折渡り労働者達が旅の途中で野宿するとされているが、異種のものどうしが衝突する場面は無い。さまざまな要素から成る自然は、動物と人間が疲れと渇きを癒す平和な所としてまずは描かれている。

そしてここに見るからに対照的な George と Lennie が登場する。その体つきや行動について動物の比喩が多用される Lennie と、頭脳の鋭敏さが強調される George は、肉体と知性という人間の2つの面を示し、互いに補完しあうものであるかのように呈示されている。のちに Crooks が Lennie 当人にからかい半分に言うとおりの (“Sometimes he talks, and you don’t know what the hell he’s talkin’ about,” 60)、知能の面で劣っている Lennie は George が語る言葉を十分理解しているわけではない。そのため、しばしば George には我慢の限度を超えることがあり、Lennie は “crazy bastard” (10, 11)、“crazy fool” (13)、“You crazy son-of-a-bitch” (15) などとののしられることもあれば、“I could get along so easy and so nice if I didn’t have you on my tail” (11) と厄介者扱いされることもある。このように George が不満をおちまけるのは、農場生活の単調さとわびしさを紛らわすためと、自分の優越性を確認して自信を取り戻すためであり、それゆえに彼には Lennie が必要なのだという McCarthy の解釈 (59) は納得できる。また、精神病院に収容されて非人間的な扱いを受ける可能性から Lennie を守っていることで、George は自分の生き方を肯定し納得できているとも言えよう。

しかし、Georgeにとって何よりも大切なのは、彼が自分の夢を語る時に Lennie が共にそれに浸り無邪気に喜びを表してくれることなのである。貯金の余裕など無い月々たかだか50ドルの稼ぎでは、土地の購入など幻でしかないとGeorgeは認識しているはずだが、少しでも心に潤いを持ち前向きに生きるためには、夢を共有できる仲間が必要なのである。自分達のペースで無理のない農作業をし、ささやかな娯楽の時間をも一緒に過ごすという夢を高揚した口調で語りあい、その後眠りに落ちるところで第一部は終わる。この第一部におけるSteinbeckの工夫を指摘しておきたい。GeorgeとLennieの話が途切れた時に“Far off toward the highway a man shouted something, and another man shouted back” (12) という文章が挿入されている。また、彼らが寝入ったすぐあとに“Up the hill from the river a coyote yammered, and a dog answered from the other side of the stream” (19) という文章が書きこまれている。背景に男同士の声の掛け合いと動物同士の吠え合う声を取り入れることにより、主人公二人の心の通い合いをさらに効果的に印象づけている。

このように孤独感を遠ざけていられる兄弟愛ともいえる人間関係が自然の中に描かれているのだが、小説の最後においてこの場所でGeorgeがLennieを射殺するという悲劇が起き、彼らの夢は崩壊することになる。それを予兆させるようないくつかの事象が、巧妙に取り入れられている。Lennieががぶ飲みする淵の水が“Looks kinda scrummy” (8) であることや、頭を潜望鏡のようにもたげて水面を滑るミズヘビ (12) が危険の潜在性を示している。また、Lennieがポケットに入れていた死んだネズミがここで投げ捨てられるのであり、初夏の自然の中に乱暴に持ち込まれる死は、のちのLennieの死につながる。それに、彼らが登場する直前にその足音を聞いてウサギが走り去るという一文があるのも見逃せない。自分達の農場を入手した際にはLennieはウサギを飼うのを楽しみにしているのだが、すでに冒頭においてウサギは彼らから逃げてしまっているのである。

映画のオープニングでは、列車が走るガタンゴトンという音がしばらく続く。そして、貨車の板の隙間からわずかに入り込む日の光のあと、貨車に座っている一人の男の黒い姿をカメラはとらえるのだが、前方をじっと見据えている彼の片目だけが光る。男は事件がすべて終わって別の農場へと列車で移動するGeorgeであり、このあと彼の回想という形式で物語が展開してゆくことになる。思い詰めたような彼の鋭い目つきからは、行動をずっと共にしてきた相棒を失った者の孤独と虚無感が伝わってくる。原作は川沿いの風景で始まり、同じ風景で終わるのだが、映画はGeorgeの乗った列車で始まり、またその列車で終わることになり、どちらも円環の構成となっている。しかし、太陽の光を浴びて生命感に満ちた緑の多い自然と、親密な二人の人間とで始まる原作とは大きく異なり、映画では列車の立てる単調な音と、暗闇と、がらんとした貨車の中の一人きりの

人間を示すことにより、孤独というテーマを冒頭から強く打ち出しているのである。

George の回想は、息を切らしながら野原を走ってくる一人の女性の姿で始まり、そのやぶれた赤いドレスが観客の目を釘付けにする。群れからはぐれて猛獣に狙われ、血まみれになって逃げまどう弱小動物のイメージである。Lennie がレイプしようとしたと誤解し必死に走って逃げるこの女性は、のちに彼に誤って殺される Curley の妻の伏線となっているわけだが、周囲には彼女を守ろうとする村の男達は見えず、ここにも一人きりの人間が示されている。

このあと、Lennie と George は彼らにリンチを加えようとする村人達に犬と馬を駆って追いかけられ、川に飛び込み、身を沈めて隠れる。これは原作では半ばあたり、すなわち働き始めた農場で George が Slim にする打ち明け話の中で明らかにされる事柄なのだが、1939年の映画はこの場面から始まっていた。この手法については「川の重要性をさらに象徴的に視覚化した」との高村博正（109）の解釈が妥当であろう。つまり、最後には Lennie の死の場となる川の暗黒面が示されるのだが、それと対照的な命を救う川を初めに示しているというわけで、この場面は1992年の映画にも使われている。

1992年の映画は自然の過酷な面をもっと早い段階で描き出している。George と Lennie が、新たな仕事の間となる目的地の農場よりかなり手前でバスから降ろされて何マイルも歩く破目になったことは、原作では George の不満として語られるだけだが、映画には州道を二人が歩く場面が取り入れられている。容赦なく照りつける太陽、赤茶けた砂利、黄ばんだ草、積もった茶色の落ち葉が喉と心に渴きをもたらし効果を上げている。さらに、通りかかった別のバスに George が手を振っても、運転手は無視して通り過ぎるという場面も付け加えられ、移住労働者を疎外して孤独に追いやりがちな人間社会の冷酷さも示されているのである。

Ⅲ 孤独者達

George と Lennie が農場にやってきてすぐ、Slim が飼っている雌犬が子犬を産んだと話す箇所がある。生まれたのは9匹なのだが、“I drowned four of ‘em right off. She couldn’t feed that many. [中略] I kept the biggest” (55) と彼は言う。この4匹の子犬の処分は、農場において役に立たない人間や好感を持たれない人間への冷遇についての伏線となっている。一員になりきれず、共同体の縁に追いやられているという共通点を持つのは、老人の Candy、黒人の Crooks、そして Curley の妻であり、彼らは1930年代のアメリカにおけるマイノリティ、社会的弱者でもあるのだ。

1. Candy

George と Lennie が農場で最初に出会うのが Candy である。農作業中の事故で右の手首から先を失ったため、250ドルの補償を得、現在は掃除夫として雇われている。年を取っているうえに手が不自由なので他の男達と畑で作業をすることはできないが、彼らと共に寝起きをする飯場で軽蔑されたり、のけ者扱いされてはいない。農場主については「いい人だ」(“he’s a pretty nice fella” 21, “He’s a nice fella” 25) と一度ならず言うし、黒人の Crooks についても “Nice fella, too” (21)、また現場のリーダー的な Slim についても “Hell of a nice fella” (27) と認めている。彼からは楽観的な人のよさが感じられ、この農場にいることに大きな不満を抱えているようには思えない。それに、子犬の時から飼い、優秀な牧羊犬に成長して一緒に羊の番をしたことのある犬がほぼ常に一緒にいて、愛情を与え、癒しを得ることもできている。それゆえ、Candy は登場した時点においては孤独に苛まれているわけではない。

Candy の愛犬は老い衰えてようやく生きているという状態であり、その哀れさと悪臭のために一人の労働者が射殺を提案する。Slim がこれに同意すると Candy も抗えなくなり、殺害は実行される。Candy が急に不安に襲われるのはその直後である。“I ain’t much good with o’ny one hand” (51) と、早晚自分も老いてお払い箱になることを予想して悲観的になる。そして、その時に耳にした George と Lennie の土地所有と共同生活の夢に自分も参加しようとするが、夢の実現の可能性の高さに胸を躍らせるのはほんの一時となってしまう。Lennie こそがパートナーでなければならない George にとっては、Lennie を自ら銃で殺した後は Candy との二人の生活を送る気にはなれない。これ以後の Candy は、老後の孤独に怯えながら生きてゆかなければならないのである。

映画では、農場に到着した新来者の George と Lennie に二匹のまだ若くて元気な犬が走り寄ってきて吠えかかる。そこに老犬を従えた Candy が現れ、吠える犬達を叱り、二人を飯場へ案内して農場主や Curley とその妻について話すのだが、この時の Candy は原作の描写から想像する以上に体はかくしゃくとしていて、それに表情も明るい。それゆえ、犬を殺された翌朝、男達が農場へと出かける時に一人立ち尽くしている彼の呆然とした姿との落差が際立つ。また、そのあと農場所有の希望に顔を輝かせる様子との違いもうまく表現されている。

馬屋で Curley の妻を誤って Lennie が殺してしまったことを知った George に向かって、原作では Candy は “You an’ me can get that little place, can’t we, George? You an’ me can go there and’ live nice, can’t we, George? Can’t we?” (78) とたたみかけることになっている。しかし、人間の死体が目の前に横たわっていて、次を取る行動を一刻も早く決めなければならない状況において、Candy がこのように尋ねるのは少々不自然では

ないだろうか？ むしろ、George の思いつめた表情を見た Candy には、農場についての質問の必要さえないと感じ取ったと解釈でき、映画のようにこの部分を省略したのは適切だと考えられる。Lennie を自らの手で殺すことを George が決意して出て行ったあと、馬屋に一人取り残されたスクリーン上の Candy には将来における孤独を覚悟した雰囲気さえ醸し出されている。

2. Crooks

Crooks は老いた Candy よりも冷遇されている。黒人であるがゆえに別の小屋があてがわれていて、一人で馬屋係の仕事に就いている。飯場で他の男達と共に過ごすことが許されず、夜になると一人きりで時間を潰さなければならない。だが、読者が最初に Candy の口を通して知らされるところによると Crooks は “Nice fella” (21) であり、農場主の機嫌が悪い時には当たり散らされるようなのだが、“the stable buck don’t give a damn about it” (21) と、深刻に悩まないタイプだとされている。

しかし、無頓着さは表面的なものであり、もともと “proud” (57) な彼は心を傷つけられないように他人との関わりを控えるようにしていることが小説の後半になってから明らかになる。肌の色の違いなど意に介さない Lennie と言葉を交わすうちに “Books ain’t no good. A guy needs somebody – to be near him. A guy goes nuts if he ain’t got nobody. Don’t make no difference who the guy is, long’s he’s with you. I tell ya a guy gets too lonely an’ he gets sick” (62) と押し込めていた感情を吐露せずにはいられなくなる。George 達三人の農場生活に加わることが許されたなら無償の労働を提供しようと言いつつ終わるか言い終わらないうちに、この場にやってきた Curley の妻に蔑称の “Nigger” で呼ばれ、反抗的な態度を見せたとして “I could get you strung up on a tree so easy it ain’t even funny” (68) とリンチをほめかされ、押し黙ってしまうしかない。

以上の経緯を見る限りでは、Crooks は孤独の中で暗澹としていると思ってしまうのだが、徹底的な疎外を味わわされているのではないことが数か所で示される。クリスマスに農場主がウィスキーをふるまった時には Crooks も呼ばれ、彼をからかった男との格闘が始まるとフェアに行なうことを皆が計らうという思いやりを示されたこともある。夕方の蹄鉄投げには一員として加えられていて、Carlson が “Jesus, how that nigger can pitch shoes” (39) と言うのに対して、Slim が “He’s plenty good” (40) と相槌を打っている。つまり、人種の相違が彼を苦しめず、むしろ彼の腕前が認められる機会もあるのだ。それに、読書と思索という彼なりの孤独との対処法がすでに培われている。Curley の妻の言葉により、Crooks は他人との距離を維持し続けるという以前の生き方に戻るようになるのだが、一度は口走った “sick” の状況にまで追いやられることは無いのではないだろうか。

映画では、農場に着いた George と Lennie に Candy が話しかけている時に、背中が曲がり不自由そうな格好で馬を率いている Crooks が映される。Curley の妻と George が二人だけで馬屋にいる時に彼が入って来る場面もあるが、彼は無言で馬屋の暗い端で仕事に取り掛かるのであり、白人の世界の隅で目立たないように生きている状況がうまく表わされている。また一方、休日の蹄鉄投げにおいては男の一人が“Come on, Crooks, put her in!”と声を掛けていて、全く孤立させられていないことも示されている。

自分が起居する小屋に入って来た Lennie に「一人でいると狂いそうだ」と Crooks が言う場面はあるが、その後 Candy が来て農場入手の夢が実現しそうだと言う部分は省かれている。従って、一瞬であっても Crooks がそれに加わりたという気持ちに駆られることは無い。Curley の妻が登場して彼を罵倒する場面も無い。Crooks に関しては、原作よりはるかに控えめな安定した扱いであり、孤独への耐性がかなり強い人間として描かれている。

3. Curleyの妻

長年この農場に住んでいる Candy と Crooks とは異なり、Curley の妻は結婚してこの農場に来てから2週間しか経っていない。しかし彼女はふしだらな女だと男達の見方は定まってしまっていて、彼女にはまだ会っていない George に、Candy は彼女を“tart” (27) だと言う。そして George も、およそ農場には似つかわしくない厚化粧とカールさせた髪 of 彼女を見た後、“tramp” (30)、“bitch” (31)、“jail bait”、“rat-trap” と様々な侮蔑的な語を彼女にあてはめ、“Bet she’d clear out for twenty bucks” (30) と決めつける。性的な関係に誘いこむために農場の男達に話しかけるのだと思いこまれていて、その危険性について George は“*She’s a jail bait all set on the trigger*” (45) と言う。こういった男達の言葉に読者の理解も影響されがちで、F. W. Watt も彼女を“*sluttish wife, the Eve who occasions the destruction of all the men’s hopes*” (61) と定義しているが、彼女は芯から“slut”なのだろうか。

入念な化粧により男達の注目を得ようとしているのは確かで、それにより彼らの性的な衝動を引き起こすことにはなるのだが、Curley の新婚の妻は性的な快楽を求めているというより、自分の存在を認められることを欲している。女性的な魅力だけでなく、ショービジネスにおける才能があることも評価されたいのである。しかし、George が“*Ranch with a bunch of guys on it ain’t no place for a girl*” (45-46) という通り、農場は彼女にとっての居場所、安らげる場所とはなり得ない。Curley はひどく嫉妬深い夫であり、妻と少しでも親しげな様子を目撃された労働者は殴られるのは必定であるし、即日解雇の可能性すら生じる。彼らのリーダー役である Slim は“*quiet and receptive*” (36) な態度ともの静かな言葉により George に自ずと心の壁を取り払わせ、内心を語らせる

ことができるのだが、Slim であってもその稀有な能力である “calm invitation to confidence” を Curley の妻に示そうなどとは思はずがな。誰もが彼女との関わりを極力避けようとするのも当然であり、それに男達は昼間農作業に従事しなければならず、夕方の蹄鉄投げや週末の街での遊びは彼女が参加できるものではない。また、隣家とは距離があるし、すでに死去したのか Curley の母親はいない。家の中でも外でも共感し合うにせよ、いがみ合うにせよ、この農家の嫁には話ができる同性の人物もいないのである。

この作品には娼館を営んでいる Susy や Clara という女性達も取り上げられている。彼女達は実際に登場するのではなく、あくまでも Whit という農場労働者の言葉を通して知らされるのだが、特に Susy は “Old Susy’s a laugh – always crackin’ jokes” (46) と陽気な女性だと描写されている。倫理上の問題はさておき、自分の責任において切り盛りする店があることや、客であれ使用人であれ話し相手が多くあることなど、Curley の妻の状況とは全く異なっていることから、彼女ほどの辛い孤独や苛立ちを感じることはないだろうと推測される。

夫との会話がなされ心の交流があれば、Curley の妻が話し相手を求めて農場内を歩き回ることは減じるはずだが、Curley は妻を性的に満足させることしか頭になく、ワセリンを入れた手袋に常時左手を入れて滑らかにさせていることは Candy にも気づかれている。そして George も “I bet he’s eatin’ raw eggs and writin’ to the patent medicine houses” (31) と想像をめぐらすほどである。労働者の一人が “He spends half his time lookin’ for her, and the rest of the time she’s lookin’ for him” (47) と冗談を言うが、求めるものが異なり心のすれ違いを繰り返す夫婦をうまく表している。

Curley の妻は、ダチョウの羽根の赤い飾りのついたサンダルを履いている。口紅やマニキュアの同じ赤は、彼女の内心にたぎるエネルギーを表し、鳥の羽根は息苦しい農場からの脱出への願いにつながるのであろうが、翼のついたサンダルでヘルメスのように飛び出すことはできない。彼女の場合は飛べないダチョウの羽根となっているのが皮肉である。

男達の話に何度も上るのに、この Curley の妻の名前は明らかにされない。夫の Curley も、彼女を探す場面では “You seen a girl around here?” (34) としか言わない。英語圏においてはこれほどファーストネームと呼ばれないのは不自然でさえある。この作品において名前が示されないのは、彼女と Candy の老犬のみで、どちらも周囲から軽視された存在であることを意味することになっている。

Curley の妻について Whit が “Well, ain’t she a looloo?” (45) と George に言う場面がある。“looloo” は “lulu” とも表記し、「目立つ人、素晴らしい人」を意味する俗語であり、女性の場合にはセクシーな魅力を持つ人となるのだが、実はこの小説には Lulu という

名前が出てくる。しかし、人間ではなく Slim が飼っている犬の名前である。子犬を出産したばかりで、盛りのついた時に牧羊犬がその周りをうろついていたという話が男達の間でなされる。この雌犬も “looloo” と形容される Curley の妻も、性的で動物的なレベルでしか見られていず、George が彼女をまさに「雌犬」(“bitch” 31) とののしる箇所もある。大柄な Lennie の苗字を Small としたり、潔癖症の男の名を Whitey としたり、名前をめぐっては Steinbeck のユーモアが感じられるが、Curley の妻に関しても巧みさがうかがえる。

最終的に Curley の妻にとって自分の思いを言える相手は Lennie しかいなくなる。もともと Lennie は知的に劣っている上に、子犬を誤って殺してしまった直後で、それが George に知られると念願のウサギの世話もさせてもらえなくなると動転している。彼には Curley の妻の心情を思いやることは到底無理である。しかし彼女は過去の恋人のことや、劇団のメンバーになることを持ちかけられたり、映画への出演の可能性もあったという体験を矢継ぎ早に話す。自分が辛さを吐き出す間、誰でもいいから生身の人間にそばにいてもらえさえすればいいという切羽詰まった状況の表れであり、これは黒人の Crooks が人恋しさについて語った以下の言葉を思い起こさせる。

“I seen it over an’ over an’ over – a guy talkin’ to another guy and it don’t make no difference if he don’t hear or understand. The thing is, they’re talkin’, or they’re settin’ still not talkin’. It don’t make no difference, no difference. [中略] It’s just the talking. It’s just bein’ with another guy. That’s all” (60–61)

結局 Lennie の怪力により殺されるという悲惨な最期を迎えるのだが、Curley の妻は死んでも誰からも憐れみの情を向けられはしない。それどころか、その死体に向かって Candy は憎しみをこめて次のような言葉を吐きかけるのである。

“You God damn tramp [中略] You done it, didn’t you ? I s’ppose you’re glad. Ever’body knowed you’d mess things up. You wasn’t no good. You ain’t no good now, you lousy tart.” (79)

当時の精神病院の患者の 3 分の 1 が、対人接触の機会が少ない農家の主婦であった(野村105) ことを考えると、この Curley の妻は同様の生活を送りながら孤独に心を病ませ、そのまま一生を終えることになった多くの女性の一例と言えよう。

映画において Curley の妻を演じるのは *Twin Peaks* (1990–91) や *Boxing Helena* (1993)

にも出演している Sherilyn Fenn で、演技力と体型の両方においてふさわしいキャスティングだと言えよう。初めて姿を現す時には George と Lennie に対して肉感的な体つきを強調する立ち方をし、そそるような視線を彼らに向け、白地に赤い花柄のワンピースの裾を指で持ち上げながら話すので、Lennie は特にその足に目が釘付けになってしまう。ただ、彼女の髪は原作に書かれたように “Her hair hung in little rolled clusters, like sausages” (30) とはなっていない。流行に沿う1930年代の女性ではなくなっているが、彼女の魅力はしっかり打ち出されている。

George が馬屋に一人でいるところに Curley の妻が入って来るという場面が映画には新しく取り入れられている。夫と間違えて椅子の脚を蹴ったため足の先が痛いのだと、ドレスの裾をまくり上げて見せるが、履いているのは赤いダチョウの羽根飾りがついたサンダルではなく、変哲もないページの靴である。また赤いマニキュアもしていない。Steinbeck はこの作品を脚本ではなく小説の形式にした一つの利点について “the novel’s ability to describe scene and people in detail would not only make for a better visual picture to the reader, but would be of value to the director, stage designer, and actor⁵⁾” と述べているが、それが活かされず、彼の登場人物描写における細部へのこだわりが活かされていないのが残念である。

この場面では、Curley の妻は George に近づきながら “Do you have a sweetheart? Did you ever have a sweetheart?” と甘えかかるような声と意味ありげな目つきで尋ね、新入りの彼を早速誘惑しようと働きかける。危険で緊張した雰囲気は、偶然馬屋に入ってきた夫と Crooks により破られるが、さらに翌日は戸外で Lennie と作業中の George に話しかけるという場面も導入されていて、映画での彼女は “slut” であることが強調されている。

また、自分が持っていた4枚のレコードを夫に割られてしまったと、Curley の妻が George と Lennie に打ち明ける場面も、原作には無い部分である。彼女が挙げる曲のタイトルは “Am I Blue?” “Little by Little” “Button up Your Overcoat” “Ten Cents a Dance” となっていて、実際に1920年代末から1930年代初頭に流行った歌である。Billie Holiday や Nancy Sinatra、Ella Fitzgerald などが歌い継ぎスタンダードナンバーとなっているので、観客の中にはこれらの歌の内容を思い出す人もかなりいるであろう。“Am I Blue?” は、恋人に去られて幸せな夢が崩れ去った女性の心情を歌ったもので、以下のようなフレーズが入っている。

Am I blue?

Am I blue?

Ain’t these tears in these eyes telling you?

How can you ask me am I blue ?
Why, wouldn't you be too
If each plan with your man done fell through
There was a time when I was his only one
But now I'm the sad and lonely one ... (Holiday)

“Button up Your Overcoat”では、風の強い日に恋人の健康を気遣って「コートのボタンを全部留めるのよ」や「毎日リンゴを一個食べるのよ」などの一つ一つのアドバイスのあと“*You belong to me*”と歌われる (Sinatra)。また“*Ten Cents a Dance*”は、荒くれ男どもを相手に一曲10セントで踊るダンサーの内心の吐露で、“*Sometimes I think I've found my hero/But it's a queer romance*”のフレーズが繰り返される (Fitzgerald)。いずれも夫に幻滅し結婚生活において寂しさを募らせる Curley の妻の心と響き合う歌詞であり、彼女はこれらの曲を聴くことで一種のカタルシスを得ていたはずなのだが、夫はレコードを割って彼女の小さな楽しみも奪ってしまったのである。Curley の残虐な性格を強調するという効果が上げられる仕掛けとなっている。

この時は週末の夜で、夫は娼館へ男達と出かけたらしく、一人取り残された彼女には何の気晴らしの術もなく George と Lennie に話しかけたのであろう。話しているうちに激昂した彼女は涙を浮かべるのだが、それを見ても George、まして Lennie には彼女の気持ちを推し量ることはできず、誰にも同情されない彼女の状況をうまく表した場面に仕上がっている。また、原作のように Crooks の小屋で彼を黒人ゆえに罵倒するという場面は無く、彼女の中の攻撃的で醜悪な部分は表に出されない。それに、新婚2週間であることも示されないのが、彼女の言動の背景には数年にも及ぶ鬱屈した農場生活があるとの印象も与えることになり、観客の側には憐れみの情が引き起こされても、反感を生じることにはならない。

Curley の妻は、殺害の意志のない Lennie によって命を絶たれてしまうことになるのだが、映画において死に追いやられる彼女は、原作のように“*bright cotton dress*” (72)ではなく、白地に小さな黒い水玉模様のドレスを着ているので、少し離れると白一色にも見える。そのすぐ後に白い鳩がこの馬屋に舞い込み飛び立って行くシーンは原作通りで、白っぽいドレスと同様、あばずれとみなされ続けてきた彼女の孤独な魂とその飛翔を象徴的に示すのに成功している。

Ⅳ エンディング

小説が幕を下ろす場所は初めと同じ川辺、3日後の時刻も同じ夕暮れ時である。静か

な木立の日陰についての文章には“pleasant”(82)との形容詞が使われているが、その直後に水面を進む不気味なミズヘビの描写が続く。冒頭の部分ですでに不吉な予兆として現われていたミズヘビは、ここではサギに捕まり一瞬にして呑み込まれてしまう。“A silent head and beak lanced down and plucked it out by the head”という文章は、音を立てずに過ぎる時と、時の神サトゥルヌスが振り下ろす大鎌を想像させさえする。こうなると、そのあと吹く一陣の風も淵の面に広がる波紋も、読者には爽やかな涼しさとは感じられなくなる。じっと動かずに立ったままのサギの方へと、さらにまた一匹のミズヘビが進んでくるのだが、ちょうどこの時この場所に Lennie はやって来るのである。

Curley の妻の殺害により Lennie には残虐なリンチは避けられないと知った George は、自らの手で Lennie を殺す。未来の自分達の農場の話で George に語ってもらい、ウサギの世話をする幸福な夢に浸っている最中に殺されるのであり、痛みを感じる間もなく射殺されるわけで、これは George の最大の愛情の表現である。Steinbeck は、Lennie の農場への夢について“the earth longings of a Lennie who was not to represent insanity at all but the inarticulate and powerful yearning of all men”⁶⁾と解説しているが、この Lennie の死と共に、George の農場入手への「強い望み」も崩れてしまう。Lennie との年齢の近さ、彼の純真さと忠実さ、体力と知能の対照性、付き合いの長さがあったからこそ二人の結びつきが強固であったのであり、老いた Crooks が Lennie に取って代わることはできない。

小説の最後は Carlson の“Now what the hell ya suppose is eatin' them two guys?”(88)という言葉となっている。Lennie の死後 Slim が George を誘って街へ出かけてゆくのだが、その二人の気落ちした様子を見て Carlson が言ったものなのだが、Candy の愛犬を撃ち殺せた彼のような人間には二人の内面を推し量ることなど不可能である。Warren French はこの部分について“Undoubtedly this sums up Steinbeck's concept of an unperceptive world's reaction to the drama just enacted”(77)と書いているが、世間の鈍感さを結論とみなしてしまうとこの作品はあまりにも絶望的なものになってしまう。Steinbeck がノーベル賞受賞演説の中で語った文学者の使命を今一度思い起こしてみよう。

The ancient commission of the writer has not changed. He is charged with exposing our many grievous faults and failures, with dredging up to the light our dark and dangerous dreams for the purpose of improvement. Furthermore, the writer is delegated to declare and to celebrate man's proven capacity for greatness of heart and spirit – for gallantry in defeat, for courage, compassion and love. In the endless war against weakness and despair, these are the bright rally flags of hope and of emulation. (*Portable Steinbeck* 691)

ここに述べられている「心と魂の偉大さ」「勇気、同情、愛」の称揚を *Of Mice and Men* においても Steinbeck は意識していたと十分考えられる。となると、彼の重点は George の愛情ゆえの殺人と、Carlson のセリフの前に描かれている Slim と George の心の交流であろう。George のすぐそばに Slim は座り、“Never mind. A guy got to sometimes” (88) と労わりの言葉をかけ、二人で飲みに行こうと提案する。力が抜けてしまった George に手を貸して立たせてやり、もう一度 “You hadda, George. I swear you hadda. Come on with me” と力づける。Sunita Jain が述べているように、“The tragedy is not that Lennie has to die; the tragedy is that George has to go on living after having killed Lennie” (39) であり、これ以後は夢を語り合える仲間の無い孤独を George は嘯みしめてゆかねばならないが、Slim という他者からの働きかけが George にとっては生きてゆく力を取り戻す助けとなることが示されている。

映画では、困った時には川の畔へ行くようにと George に念押しされていた Lennie が、木立を抜けて川にたどり着き、膝まで水に浸かって歩き回る。そして小説においては、頭の中に浮かんだ Clara 伯母さんや巨大なウサギを相手に自分の犯した行為について自らを大声で罵ったり、George に見捨てられる不安を叫んだりするのだが、スクリーン上には声を出す Lennie の様子は描かれていない。言葉も失い、目の焦点も定まらず、足元もおぼつかなく歩く様子は納得のゆくものである。

しかし、原作の結末において大きな意味を持つと思われる Slim の George への言動は省略されている。他の男達が駆けつける部分そのものがカットされ、Lennie の射殺後すぐ、画面はオープニングと同じ貨車の暗闇に座っている George に切り替わる。オープニングでは乾いた鋭い視線だったのが、ここでの彼の目には涙がうっすらと滲んでいる。そして、重い穀物袋を彼と Lennie が目を合わせ微笑みを交わしながら荷車に投げ上げて一つの作業を終え、畑の中の道を肩を並べて歩いて行く後ろ姿が映し出されて映画は終了する。Slim という理解者を登場させず、かけがえのない相棒を失った George の徹底的な悲哀と孤独が強調される効果を上げている。

Steinbeck は、孤独な人間達の夢とその挫折を描きながらも、Slim を最後に登場させることで人間の同胞への理解と愛情への可能性を表したのだが、1992年版の映画は孤独の中で毅然と生き続けてゆく他はない Georg を印象づけている。だが、ルロイ・ガーシャが述べているように「スタインベックの洞察は、善と悪、強さと弱さ、愛と憎しみ、美と醜との並置」(19) であったことを思い返してみると、エンディングにおける George の孤独と、二人の男の親和的な姿との対照的な画像は、作家の「洞察」に沿ったものだと解釈が可能であろう。暗い貨車に座り込んだ George ではなく、太陽の光の下を共に歩く George と Lennie で締めくくったところに、原作とは異なった形ではあるが、作

家が打ち出そうとした人間同士の強い結びつきとその重要性は十分描き出されていると言えよう。

注

- 1) 監督Lewis Milestone、脚本Eugene Solow。また、1981年には監督Reza Badiyiの下でテレビ映画が制作された。
- 2) <http://www.ahafilm.info/movies/moviereviews.phtml?fid=7048>
- 3) <http://www.qwipster.net/miceandmen.htm>
- 4) その例として “This is a masterful and faithful portrayal of Steinbeck’s classic novel” (<http://www.imdb.com/title/tt0105046/>) や、「基本的には、まったく原作になぞらえて映画が作られているといって良いだろう。その忠実な映画製作の良い例は、鮮やかな情景描写や適切な配役である」(大木 73) がある。
- 5) *Stage* (January, 1938), pp. 50–51. Peter Lisca, *The Wide World of John Steinbeck*, p. 133における引用。
- 6) Steinbeckから代理業者McIntosh & Otisへの1936年9月1日付の手紙。*The Wide World of John Steinbeck*, p. 134における引用。

引用文献

- French, Warren. *John Steinbeck*. New York: Twayne Publishers, 1961.
- Jain, Sunita. *John Steinbeck’s Concept of Man: A critical Study of His Novels*. New Delhi: New Statesman Publishing Co., 1979.
- Lisca, Peter. *The Wide World of John Steinbeck*. New Jersey: Rutgers University Press, 1958.
- McCarthy, Paul. *John Steinbeck*. New York: Ungar, 1980.
- Steinbeck, John. *Of Mice and Men*. Harmondsworth: Penguin Books, 1970.
- , *The Portable Steinbeck*. Ed. Pascal Covici, Jr. New York: Viking Press, 1971.
- Watt, F. W. *John Steinbeck*. New York: Grove, 1962.
- 大木正明「二十日鼠と人間」、八尋春海編著『映画で楽しむアメリカ文学』金星堂、1999年。72–75頁。
- 高村博正「スタインベック—非目的論的思考と生き抜く力」、岩山太次郎・別府恵子編『川のアメリカ文学』南雲堂、1992年。203–214頁。
- 野村達朗『フロンティアと摩天楼』講談社、1988年。
- ルロイ・ガーシャ「序文」、『スタインベックの創作論』テツマロ・ハヤシ編、浅野敏夫訳。審美社、1992年。15–20頁。

〔映画〕

- Milestone, Lewis. *Of Mice and Men*. United Artists, 1939.
- Sinise, Gary. *Of Mice and Men*. Metro-Goldwyn-Mayer, 1992.

〔CD〕

- Holiday, Billie. *The Classic Decade: 1935–1945* Prism Platinum, 1998.
- Fitzgerald, Ella. *The Complete Ella Fitzgerald Songbooks*. Verve, 1993.
- Sinatra, Nancy. *Sugar*. Sundazed, 1995.